



①「山と道」。ハイキングを通じて感じた本当に必要な道具を形にしていることを掲げる山道具メーカー。②③「うみの図工室」。逗子海岸すぐそばにある、地域に開かれた図工室。子どもとおとなが混ざり合い、身近な自然と最新のテクノロジーを活かし、自由にもものづくりやアート活動ができる。場の貸し出しも応相談。

とのご縁が、次の『そっか』へと繋がり今の活動に至る。「『そっか』では、例えば子どもたちと箱根の山をナイトハイキングして、夜の山道のドキドキを感じながら、途中でお湯を沸かしたり、エマーゼンシーシートに包まって寝たりを体験する、エッジの効いた企画をしています」。それらの活動には、『山と道』で得た技術と経験が不可欠となっている。

彼の周りでは、ご縁や経験がシームレスに循環し、今なお持続的に相乗的に広がっている。

木村さんの、複業のススメ

人によってなぜ複業を選ぶのかという答えは異なるが、彼はどこに価値を見出しているのだろうか。「自分が住んでいる地域へ関わるための手段としての意味合いも強いと思います。自分にとっては、『うみの図工室』から駅まで歩く道の途中で声をかけてくれる人が増えたり、晩御飯のおかずを分けてくれる人がいたり、そんな暮らしってとても豊かなもので、それはお金以上に、自分にとっては大切にしたいものなんです」。

街の中の自分という視点を強く持つ彼だが、もちろん複業はボランティアではなく、事業として持続していくためのお金の循環も視野に入れている。今

までは自主的なワークショップ開催が主体だった『うみの図工室』を、今後は価値観を共有できる、子ども向けに何かを始めたい人にも場所を提供する形へとスタイルを変えていくという。例えば子どもがカメラを持って街に出て写真を撮り、自分の興味がどこにあるかを探るワークショップに場所を提供するなど、すでに運用が始まっている。その活動に地域の子どもたちを招待したり、サービスを改善するアドバイスをするなどサポートすることで、誰かの事業を応援する場所に育てていく。

「一番大切なのは事業としての複業ばかりを考えるのではなく、地域に出て何か活動することから始めようという視点だと思います」

複業は持続可能であることが前提となる。まずは本業で安定的な基盤を持ちながら、自分の心が豊かになる方向で複業を始めてみる。最初から事業として考えなくても、まずは小さく始めて育てながら、将来的な事業化を見据えるという複業の形を、彼は示してくれた。

彼がそうであったように、誰かのやりたいこと、複業を応援する土壌が、この街にはある。自分の「好き」や「興味」を見つめ直し、地域と関わりながらご縁を繋ぎ、貴方なりの複業を始めてみてはいかがだろうか。

話し手
木村 弘樹さん

逗子歴6年。前職ではものづくり教室の立ち上げやイベント企画、エリアマネジメントなどの仕事に従事。現在は鎌倉の山道具メーカー「山と道」で働きながら、逗子の子ども向けものづくり教室を「うみの図工室」を主宰。

山と道 <https://www.yamatomichi.com/>

うみの図工室 instagram@umi.no.zukoushitsu
<http://umi.no.zukoushitsu.com>

そっか <https://sokka.life/>

聞き手
庄司 賢吾 / 庄司 真帆

逗子・葉山を拠点に活動する、編集カンパニーandsaturday inc.の夫婦。企画 / 編集 / 場づくり / 撮影 / デザイン / PRまで、逗子でお力になれることがあればお気軽にご相談ください。主宰：土曜日だけの珈琲店 / 逗子葉山 海街珈琲祭 / 雑誌逗子 / よむ料理店

[instagram@andsaturday](https://instagram.com/andsaturday)